



LIFE Vida

生活について

これは9月の報告書であるが、私がリスボンに到着したのは22日のことである。本来11日には着いていなければならなかったのだが、ビザ申請が遅れてしまいこのようなことになってしまった。留学を志している方はアクセプタンスが届いたらすぐに大使館へ出向いてほしいと思う。

さてポルトガルの首都リスボンでの学校生活はまだ慣れないが、そこまで不便ということもないと思う。住まいはBairro Alto 地区にある月290ユーロのルームシェア。設備は簡素であるが一通り揃っており申し分ないのだが、家の前の通りに深夜まで営業するバーが多く、酔っ払いが夜中までにぎやかなのが慣れない。

近所にはMini preço というスーパーマーケットがあり、日曜日も深夜24時まで営業しているので便利。以前フランスへ

ワークショップに出向いた際はすぐに閉まってしまう店や日曜休業の店が多く苦労したが、とりあえずそういうことはなさそうである。また、郊外にあるコロンポシヨップングセンターには巨大なスーパーマーケット Continente やファストファッション、雑貨店などが入っており一通り見て回るのに半日はかかるかという規模である。特に、AKI というDIY用品をそろえたホームセンターは制作に使えそうな材料や道具を豊富に揃えていたので、今後も利用することになるだろう。初回はとりあえず欧州電源仕様のホットボンドなどを購入した。

買い物に関して言えば、物価はかなり安く感じられる。欧州では一般的なのかもしれないが、ミネラルウォーター1.5Lはスーパーマーケットなら0.1ユーロ程度で買える。飲料では、牛乳1Lが0.8ユーロ程度、

ポルトガルビール500mL缶が0.6ユーロ。パンやパスタ、ビスケットなどの菓子類といった穀物由来の食品はかなり安い。また小さなスーパーでも肉・魚(干物)が豊富に揃っていることが多くこれも安い。

制作に必要なものは先のホームセンターに加えて美術用品店でも購入できる。Bairro Alto からほど近い中心地区 Baixa にある "Ponte des Artes" は、規模こそ小さいながらも画材を多く取り扱うデザ科心くすぐる店である。日本からの輸入品も多く割高であるがボールペン、マーカーやカッターなどは馴染みのものが手に入る。ただ、デザイン用の紙は高くマーカースケッチ用紙はA3の25枚綴りが20ユーロ近くするものもある。クロッキーなどは日本から持ち込んでもいいかもしれない。

Bairro Alto Location



リスボンは坂の多い街である。実際シェアハウスから学校までは1kmほどであるが、かなりの高低差があるためか学校帰りの上り坂はいい運動になる。私の住む Bairro Alto 地区は日本語で「高い地区」という意味で、意味通りに坂の上にある。学校とは反対側の中心地区 Baixa 地区は「低い土地」という意味で、書店や美術用品店へ出向く際はまた坂を下ったり上ったりする必要がある。また坂の多さもさることながら、路地の狭さも特徴的かと思う。特に Bairro Alto 周辺は住民と観光客が入り混じり、すれちがいで一時車道に降りなければならぬこともしばしば。歩道のすぐそばにトラムのレールがあるので、日本では考えられない危険さである。小さな路地では工事中で未舗装の場所もある。どうやら古い路地を改装する段階にあるようだ。



Lisbon Metro Baixa-Chiado St.

リスボンにはトラム・メトロ・バス・ケーブルカーといった交通機関があり、共通の決済システムを持っている。1時間以内の乗り換えなら1.45ユーロでどの交通手段も乗り放題らしいので積極的に利用したいと思う。郊外のコロンボショッピングセンターへのアクセスもメトロを使えばかなり楽になる。時間帯にもよると思われるが、昼過ぎの車内は座れる程度に空いていてスリなどの気配はなかった。車社会のリスボンではトラムやバスは交通状況に大きく依存するようで、先発のトラムが追いつかれている様子もよく見られる。



STUDY Estude

勉強について

IADE の受け入れは少々混乱していた。私のように到着が遅れた、または手続きが遅れている学生が多くおり、10 月に入った現在も手続きは続いている。実際、学生の授業状況などを管理する Blackboard への登録もまだ済んでおらず、授業の出席が登録できない状況である。そんな中とりあえず受ける授業のスケジュールを確定することができたのは IADE の Buddy program によって Buddy (現地学生) によるサポートがあったからだと思う。どんな基準で Buddy が選出されているかはわからないが、留学生数名に対して 1 人の Buddy が割り当てられている。私の場合、授業で Buddy の学生に会えるので、その都度困っていることなどについて聞くことができ非常に助けられている。

私はプロダクト系の授業 3 つに加え、初

歩的なポルトガル語のクラスを受けることにした。プロダクト系の授業としては、Product Design、3D Digital Modeling、Industrial Design である。このうち Product Design についてはマスターの授業で、留学生は 1 つだけ受講できることになっている。私は予定より到着が遅れたのだが、どの授業もほぼ初回から参加することができた。まだ始まったばかりで完全に把握できていないが、授業の内容を紹介したいと思う。

Product Design

Wed 19:00~20:30, Thu 19:30~21:00

15 人程度の少人数のクラスで、グループに分かれて毎週異なるトピックについて作業する。授業はポルトガル語と英語を交えて行われる。1 週目は複数のデザイン系雑

誌から 2 誌選択して写真や紹介するオブジェクト、質感からそのコンセプトを抽出するという内容だった。プロダクトの授業ながら (おそらく学生に身近な) グラフィカルな雑誌を用いて、既存の製品のコンセプトを捉える訓練とすることが斬新な内容だと感じた。

3D Digital Modeling

Tue 19:00 - 23:30

プロダクトデザインのための 3D モデリングを扱う授業。ソフトの使い方から手取り足取り進められる授業は新鮮であると感じられた。またエンジニアリング系の 3DCAD に慣れ親しんだ私にとって疎遠であったポリゴン系 3DCG (3DS MAX) に触れるには最適の機会となったと思う。これから高度になっていくモデリングがとて

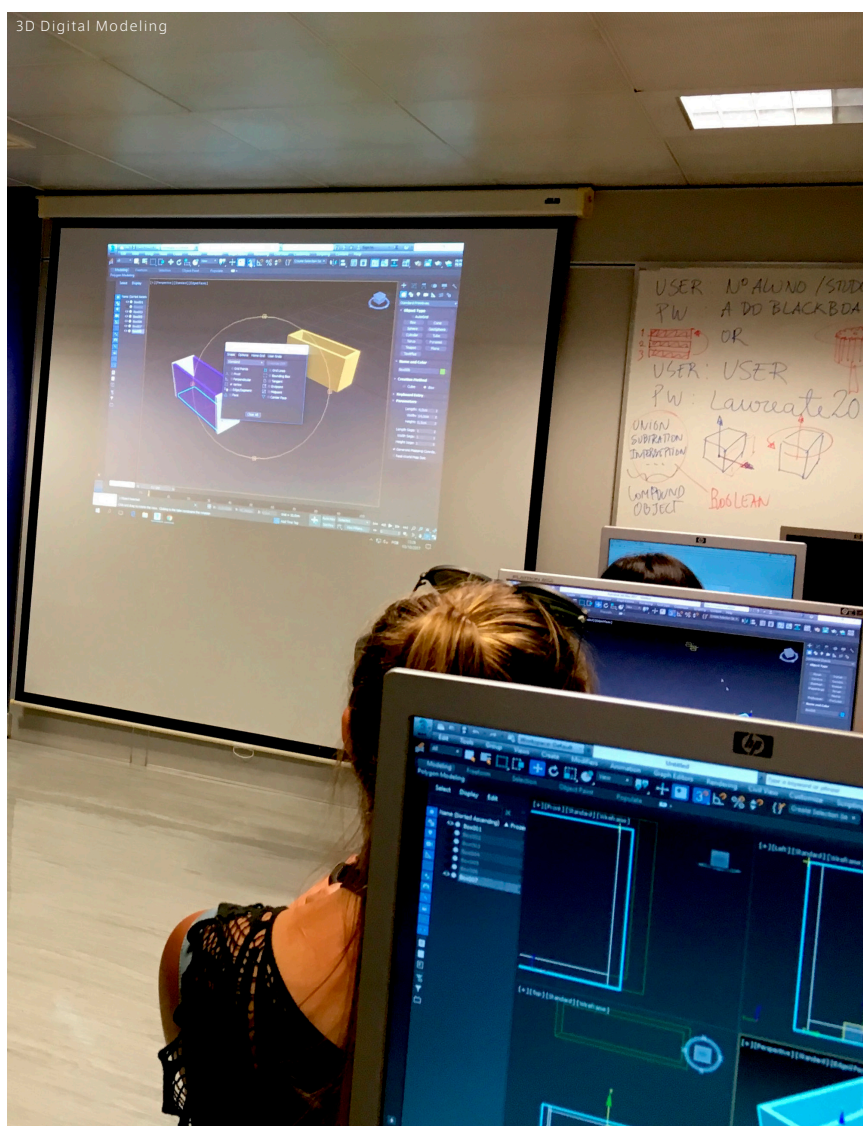
も楽しみである。授業時間は夜間でとても長いが、1時間程度の休憩があり、しっかり集中して取り組むことができる。また、これはポルトガルにおけるどの授業にも言えることだが、とても気さくな先生で質問などもしやすい雰囲気である。

Industrial Design

Mon 8:00 - 10:30, Wed 10:00 - 12:30

プロダクトスケッチや基本的な製造技術、材料学などを包括的に扱う授業。1時間ほどのレクチャーの後に、先生から出されるお題にもとづいてスケッチをするという流れで授業は進められる。レクチャーの内容はデザインにおけるスケッチの必要性、材料や製造法の進歩をデザイナーが思い通りに利用するための方法といったものである。スケッチのお題としては、天井からぶら下げるタイプの電源タップ（2点透視の練習として）、様々な材料について見たことのある椅子、椅子を作るための技術を説明するボード（材料のレクチャーと絡めて）といった内容である。たまに宿題が出されることもあるが、そこまでヘビーな内容ということもないので課題まみれという状態にはなっていない。（今の所は。）

こちらは学部の授業なので、ポルトガル語がメイン。しかしながら先生や周りの学生が英語で説明してくれるので取り残されることはない。ポルトガル語で表現される微妙なニュアンスまで理解できないのが歯がゆい。



LIFE Vida

生活について



ポルトガルでの生活も一ヶ月が経ち、日本との違いにも慣れてきた。ここでリスボンでの金銭事情について紹介したい。日本では現金決済が比較的一般的と思われるが、欧州圏ではクレジットカードが盛んに利用されていると感じる。スーパーのレジはカード利用のために最適化されたようなレイアウトになっていたり、ハンバーガーチェーン店ではタッチパネルの自動オーダー装置にカード挿入口が備わっていたりする。(後者は国際クレジットカードが使えない店舗がある。) ポルトガル国内の金融サービス "Multi Banco"(マルチバンコ) が広く普及しており、国内銀行や国際クレジットカードが至る所で利用できるほか、リスボン市内には多数の ATM があり、クレジットカードがあればいつでも現金を引き出すことができる。カフェやレストランは現金のみの場合があるほか、よく利用するコインランドリーで現金を利用するので、使うぶんだけ ATM で引きおろすようにしている。余談だが共用の洗濯機のドアが壊れてしまい現在使用不能なので洗濯は全てコインランドリーに頼っている状況である。1 回に 6 ユーロ (洗濯 4 ユーロ、乾燥 18 分 2 ユーロ) かかり、少なからず負担となっている。



街中を見渡すと、建物や駅などの公共機関の装飾にタイルがさかんに使われていることがわかる。絵柄を繰り返すものや、一枚の大きな絵を構成するものなど様々である。リスボンの土産として有名であり、コルクの縁などと組み合わせられた商品をよく見かける。

STUDY Estude

勉強について



セメスターが始まり一ヶ月が経ち、それぞれの授業の内容はだんだんと濃くなって来ている。また、10月の第4週からポルトガル語の授業も始まった。この授業では短い時間のなかでポルトガル語を習得することは無理と割り切った上で、リスボン付近の史跡や美術館を廻りながら日常会話やポルトガルの歴史を学ぼうという主旨で進められるようだ。10～20ユーロほどする美術館の入館料がタダになるらしくおいしい授業だと思う。最終的には廻った施設についてポルトガル語を用いて日記の形式でプレゼンテーションを行うらしい。ポルトガルについて学ぶめったにない機会なので、積極的に参加していきたいと思う。今回は私の受けている授業の中で、インダス

トリアルデザインの授業について紹介したいと思う。

この授業では、インダストリアルデザインに必要な知識と技術を統合的に扱っている。1コマ2時間半の授業の前半では、材料や製造法についてのレクチャーがあり、後半ではスケッチをするというような流れで進められている。セメスターの後半に予定されている課題の準備段階として、現在は椅子のデザインについてのリサーチに取り組んでいる。前項の写真はその1シーンで、IADEで以前導入されていた椅子についてその部品構成や製造過程を観察から読み取り、スケッチで表現するというものである。椅子という身近なプロダクトについて、どう作られているかや新たにデザイン

する場合どう作る必要があるのかということについて考えるきっかけになり、授業としてここまで扱うことに新鮮さを感じた。

この他にも、機能や役割に着目して既存の椅子をリサーチおよびスケッチしたり、これまでの経験からどのような椅子が快適・不快であったかをスケッチで表現するということを通して椅子について理解を深める取り組みを行なった。

他の授業にもそれぞれ特色があるが、この授業については実践的な製造に根ざした指導がなされていると感じた。基礎的ではあるが初めて目にする材料などもあり新鮮な部分が多く、これからの授業も積極的に吸収していきたい。

LIFE Vida

生活について

温暖なリスボンの気候もすっかり冬らしくなった。街のあちこちでクリスマスの装飾が施されるようになってきている。大通りや広場はもちろん、小さな広場までツリーが飾られており日本との違いを感じる。近所の広場では屋台が並び、ポルトワインで作ったホットワインが振舞われている。ポルトガルは温暖な気候と日照量のおかげで各地でワイン生産が盛んなことはよく知られている。スーパーでは安くて美味しいワインに出会うことができる。

寒くなってきたとはいえ 10℃程度なので凍えるようなことはないが、それでも部屋が寒く感じることもある。安いアパートなので暖房はないが、ワインで体を温めて冬を乗り切ろうと思う。





授業時間の合間に近所を散策した。リスボンは日本以上にコンパクトな街だなと感じることが多い。少し歩くだけで街の様がどんどん変わっていくし、気がついたらものすごい高低差を歩いていて激坂を登って帰らなければならない時があったりするためである。

そんな散策中に見つけた公園によく出かけている。特に何をするわけでも無い。ただなんとなく、リスボン市内としては掃除の行き届いた小綺麗な空間が居心地が良く、飲み物を持っていけばお金がかからないという理由でそこで時間を過ごしている。

最近は節約を意識することが多くなった。お金がないというのももちろんある

が、節約するための過程にこそ現地の文化が感じられるからである。タッパーに無造作にパスタを詰めてランチにするスタイルはかなり経済的であり、時短でなおかつ出先で温められ合理的である。今はまだパスタ弁当どまりだが、時間を見つけてタラ料理や豆料理にも挑戦したい。



STUDY Estude

勉強について

11月末にバルセロナを訪れた。アントニ・ガウディの建築が数多く残る街である。もっとも有名な観光地のひとつにサグラダファミリアがある。大きなカトリックの行事も行われる聖堂である。今、私はこれを単なる観光スポットではなく、ガウディの造形思想を学ぶための偉大な資料として捉えるべきだと思っている。自然の中で作られる造形を設計に取り入れそこに合理性を見出すとともに信仰心を表現しようとしたのではないかと思いを馳せた。またガウ

ディは建築に際して非常に多くの模型を制作し試行錯誤していたことが地下の資料館に残されており、デザインを志す身としては学ぶことが多かった。模型を見ながら職人が図面なしで建てた建築物もあり、精巧に作られていたようだ。図面で表すと複雑になりすぎるので実施にも模型が必須だったとも言えるかもしれない。個人的には大聖堂にある樹木を模した柱が、枝分かれすることによる天井面への効果がどれほどかわからないが、とても好きである。

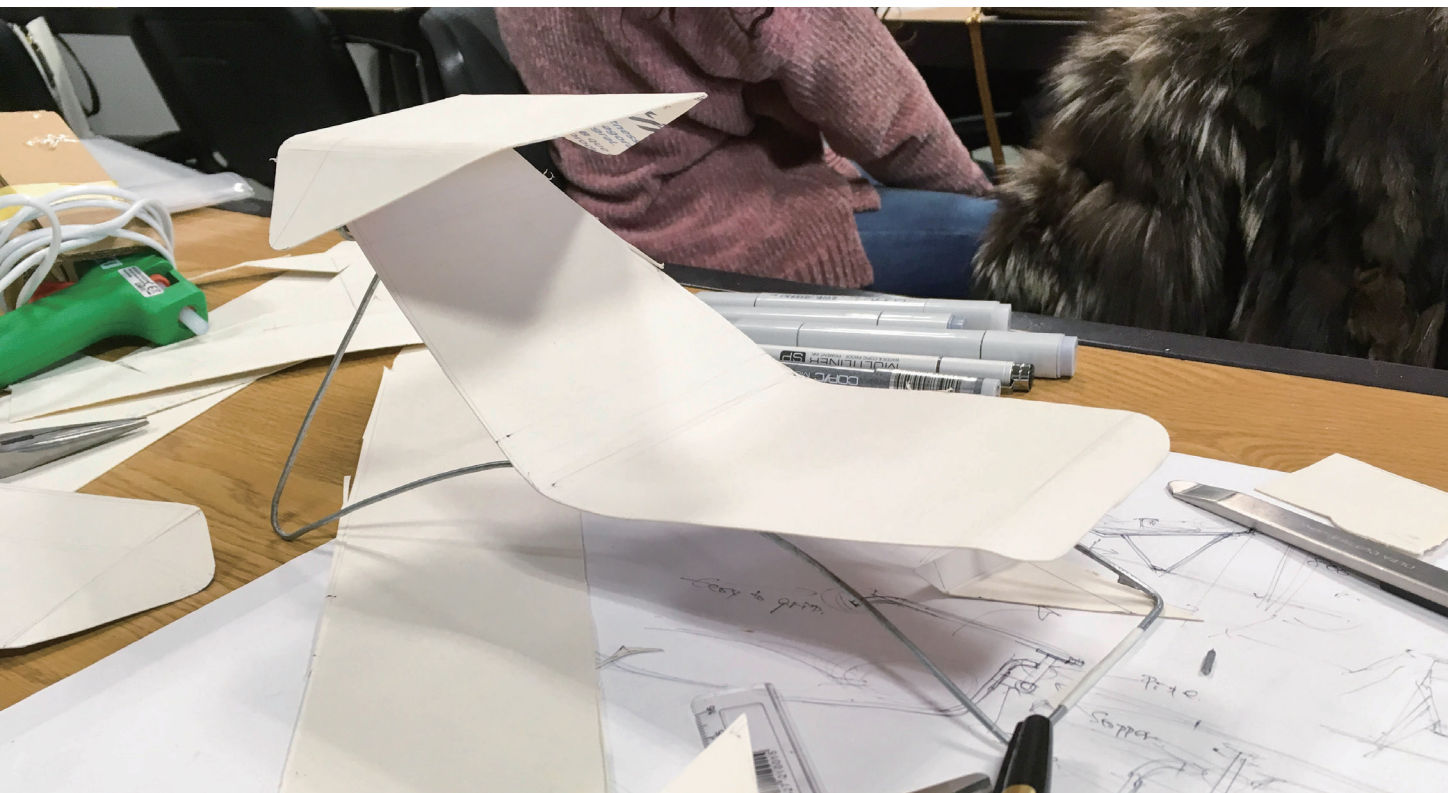


ガウディの後で畏れ多いが、授業についても報告したい。

時期的にはどの授業も佳境に入ってきているが、雰囲気は相変わらずのんびりしている。3D モデリングの授業では、完全に作業ペースが学生に任されている。私はその時の課題が早めに終わったので追加のチュートリアルに取り組むことができ、やる気次第でいろいろな機会が与えられているのはとても良いと感じている。

プロダクトのクラスではイタリアのブランド O bag を調査し、そのブランドに対して新しい提案を行うという形式でプロジェクトが進んでいる。先生は毎回の課題の出来よりも全体の過程が大事だというスタンスで、自らの経験なども話してくださるので面白い。

インダストリアルクラスでは、様々なマテリアルの椅子を調査しその製造法などを学んだ上で、合板とパイプを用いた各々のコンセプトの椅子をデザインしている。私のコンセプトは「Chairs for Napping」である。模型の制作を通して授業は進められている。



LIFE Vida

生活について

千葉ほども寒くないリスボンの冬は、寒さよりもむしろ湿度に悩まされる日々で、毎朝部屋の窓や石の壁が結露する。洗濯物はもっぱらコインランドリーの乾燥機に頼っている。一年のうち 290 日が晴れのリスボン市で、その残りがこの季節に集中している。

クリスマスが近づくにつれて観光客が増えていくのをみて、住んでいる街が観光地であることを再認識する。たまに卒業旅行らしき日本人を見かけるが、欧州からの家族連れが圧倒的に多いと感じる。ポルトガルののんびりした雰囲気そうさせるのかもしれない。

のんびりなのか本当に忙しいのかわからないが、未だに 10 月に送られた荷物が税関で止められている。出国直前に不調となり修理に出していたカメラが届けば、ポルトガル観光のモチベーションになると思うのだが。



12月31日、課題の調査と買い出しに街へ出かけ、一通り落ち着くともうすぐ夕方という時間になっていた。カウントダウンにはまだ時間があるが、2017年最後の夕日を見にいくことにした。家からすぐの公園が実はちょっとした夕日スポットであることを知り、5分ほど歩く。公園にはすでにたくさんの人々が賑わっていた。陽は落ちかけていたがまだ日の入りまでは時間がありそうだったので、ビールでも持って来ればよかった、と思った。思えばリスボンに来てから初めてちゃんとみる夕日だっ

た。厚い雲がかかっていたが、少し肌寒さを感じるような風もありすぐに切れて行った。公園には打楽器を持った人々がいて歌声も交えて盛り上げていた。日の入りの時間帯になると、演奏は落ち着き、皆が太陽を見守るような状況になっていた。いよいよ日がシントラの山々に沈むと、ここからが本番といわんばかりの演奏が始まった。観客も混ざって踊っているのが見えた。すっかり暗くなってもお祭り騒ぎは続いていたが、一旦帰宅して夕食をとった。仮眠をとり、カウントダウン直前にまた同

じ公園に行こうと思ったが、花火の音で起きカウントダウン出来ず。そこから眠れずに元日から強めの風邪をひく、そんな年越しだった。



Viewpoint of Santa Catarina



The Master of Studio

STUDY Estude

勉強について

椅子がテーマのインダストリアル授業は、実際に近い材料を使ったプロトタイプを作る段階に来ている。金属のパイプと合板を使うという制約があるので、一度に様々な製造方法をシミュレートしながら制作を行う体験ができる。合板の曲げ加工やパイプの溶接なども製品同様に行い、いわば製造方法のプロトタイピングをおこなっているような感覚である。

どの授業も制作段階に来ているようで、アトリエはいつも学生であふれている。アト

リエには溶接などのサポートをしてくれる技術職員の方が19時まで常駐していて、作業していると何気なくアドバイスしてくれる。日本とは使う道具や接着剤が見慣れないものだったりするので助かっている。初めは環境の違いに戸惑うかと思ったが、逆に発見が多く楽しいことに気づく。

プロダクトのクラスは O bag への提案（というプロジェクトの体）がおわり、いままで積み重ねて来たメソッドを他のブランドに応用するという段階に来ている。写真は講評の様子で、全員のスケッチを壁に張り出しポストイットで投票させるのは日本と同じであった。

現在は、IKEA のプロダクトを題材に、O bag をデザインした時のプロファイルを用いるということに取り組んでいる。プロ

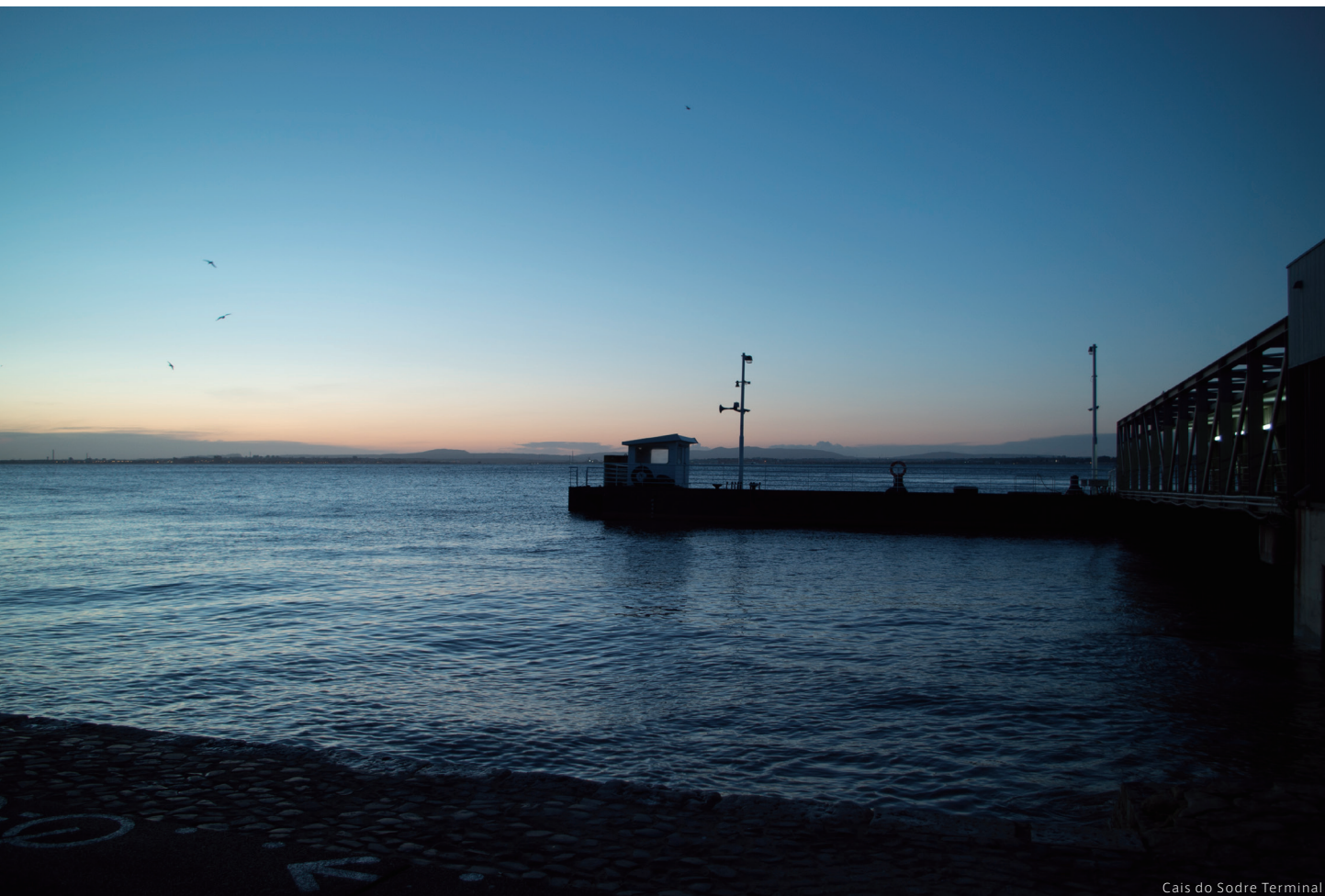
ファイルを決断するまでの思考は直接のデザインとは別なので、どんなものにも適用できるはずである、という前提に立っている。一度 O bag を経た後なので、一つのタスクにより速度を求められるようになってきた。決まった時間内により多くのアイデアを出すことが重要視されており、現在も実際の現場で活躍している先生による非常に実践的な指導だと感じた。

1 月からは最終的なビジュアライズの段階

に進む。一つの作品として仕上げられるよう取り組んでいきたい。



The Review



Cais do Sodre Terminal

LIFE Vida

生活について

長く税関で止められていた荷物がやっと届き、およそ四ヶ月ぶりにカメラに触れた。カメラなどの高額物品が含まれる場合や、物品の数量が記載と異なる場合などで長期にわたって税関で止められてしまうようである。今回はその両方で、税関調査料として100ユーロほど取られてしまった。やはりこういったものはきっちりと処理しなければいけないと学べた。

住居について、アパートのオーナーの都合で1月末に退去することになってしまった。日本ではありえない出来事に困惑して

いるがどうにもなりそうもなかったのでドイツに渡航するまでの一ヶ月ほど安い宿を泊まり歩くことにした。宿の問題と同時にドイツの住居を決める必要があった。ドイツの住居は競争率が高いと聞いたのでリスボンでの2倍近い家賃に倅きながらも割り切って決めた。これを機に2月にはポルトへ旅行に行くことにした。リスボン市内でさえもあまり回れていないので、美術館や歴史的な街並みを探訪したいと思う。

カメラが届いたので、最近は街を歩きながらスナップ撮影したり、建築物を撮ったり

することが増えた。授業が終わってからは遠出もするようになったので、より撮影の機会が増えた。趣味の範囲ではあるがマニュアルで構図作りに励んでいる。同じものを撮るにしても、見え方をきちんと作った写真は伝わり方が違うなと思う。性格の問題で出不精になりがちなのだが、写真を撮りにでかけることで発見があったり、ちょっとしたコミュニケーションがあったりとカメラに連れだされている感覚で、これからの留学生活も楽しもうと思う。



Making Final Model

STUDY Estude

勉強について

IADEでの授業は1月なかばにすべて終了した。Industrial Designの授業では実際の製品に近い材料を用いた1/5スケールのモックアップ制作に取り組んだ。実際に自分がデザインした製品が製造されるしらのような工程を経るのか、そこに無理は生じないのかを考えるいい機会となり、妥協のない製品がいかに価値を持つかということを改めて感じた。作品については写真と以前のスケッチをまとめて提出という形式で、プレゼンテーションはなかった。Product Designの授業では、以前までの

内容を応用しフロアランプのデザインを行った。前回までの手書きのレンダリングに加え、どんな形でもいいので納得させられるものを持ってこいという最終課題に対して私は3DCGによるレンダリングイメージを制作した。3Dプリンタを用いた模型を持ってくる学生もあり、CGを用いた他の学生の作品も非常にレベルが高く刺激を受けた。学生個人の得意な表現方法と実力に任せた課題形式は実践的であると感じた。この授業も最終的にすべての制作物を印刷し製本して提出する形式だった。

3D Modelingの授業では、1月に入ってから簡易的なアニメーションの実装を行い、モデル提出して終了という流れだった。プロダクト系の先生が担当であったので実践的な内容が含まれているのかと思っていたが、内容的には初めて3Dに触れる人向けという感じであった。それでも今まで触れたことのなかった領域に触れるきっかけとなったことは大きいと感じる。やはりこの分野は個人がどれだけ努力や経験を積んで自分の道具にできるかという世界だなと感じた。



Casa da música Porto

LIFE Vida

生活について

一月末にアパートを出されたので、3月のドイツ渡航までの間の宿を確保する必要があった。アパートの形式だと、最短で30日借りる必要があったり、月をまたぐと一月分の家賃がかかったりするので、ホテルを転々としている。ポルトガルは盗難が多いと聞いていたので若干不安があったが、カードキーやロッカーが充実していたので多くの場合で安心できる。

2月1日～6日までポルトに滞在した。ポルトガル北部にある歴史ある街で、観光客向けのサービスが充実していたと感

じる。リスボンと同じような坂の多い街で、地図上では離れていなくても複雑な起伏や長い階段を越えなければならないことがあった。狭い路地を抜けると大聖堂があったりなど歩いて観光するととても展開があり面白い。またポルトにはポルトガルの建築家アルヴァロ・シザによる劇場や美術館といった建築が多く存在し、いかにも西洋のゴシックな街並みの中にミニマルスティックな彫刻のような建築がある様子が新鮮に感じた。

リスボンに戻ってからは2つのホテル

を利用した。どちらも一泊15ユーロほどで、一ヶ月暮らしてもそこまで負担にならない。さらにキッチンが使えるので自炊しながら節約することができた。共用スペースでは自然と異文化の人々と交流することになるので、そういう部分では個室のホテルやアパートよりも価値があるかもしれない。



STUDY Estude

勉学について

この一ヶ月は授業がなかったので、自分なりに無理なく取り組めるテーマをいくつか探して取り組んだ。カメラが1月に届いたので写真に関するものと、自分のポートフォリオに関するものについて観光の合間に進めた。

写真に関しては、普段より意識してスナップを撮るようにした。観光地はもちろん、家の近所の公園や路地でも何か面白いものはないかと探しながら撮り歩いた。リスボンはコンパクトな街なので、撮り歩いているうちに別のランドマークにたどり着くな

ど、目的地を決めて交通手段を使って向かうよりも街の大きさを足で感じる事ができたと思う。また、定点で数秒間の間隔を置きながら撮影した画像を一つの動画にして表現するタイムラプス動画の制作を行った。いくつかの観光スポットや中心街を被写体にし、移動する人や車の様子を早送りのような処理をすることで、現実とは違う世界のような表現となった。リスボンは冬でも強い日差しが降り注ぐため、歩く人々、街の外壁や屋根、建設用のクレーンなどが鮮やかに写る。これを生かして、ミ

ニチュアの世界のような表現で動画を制作し、そのうちいくつかは Facebook に投稿した。

ポートフォリオに関するものとして、作品集そのものを持っていなくても手軽に見せられる形態をめざし、ウェブサイトの制作を行った。ほぼ初めての制作だったため、web デザインの奥深さや難しさを思い知ることとなった。一応完成したが、様々なデバイスに対応していないなど改善すべき点がおおく、修正を続けていきたい。

LIFE Leben

生活について



Cologne Dom

リスボンでのホステル暮らしを経て、3月6日からケルンでの生活が始まった。住居は5人でシェアするフラットで、リスボンの住まいと比べると格段に良かった。学校があるケルン中心部から7,8kmほど離れているが、トラムの駅も近く大きなショッピングセンターもあり大きな支障はない。落ち着いた雰囲気ので気に入っている。

ケルンに来てまず、交通機関の乗り方に驚いた。電車やトラムの場合、駅に改札はなく、券売機でチケットを購入後、Sバーン

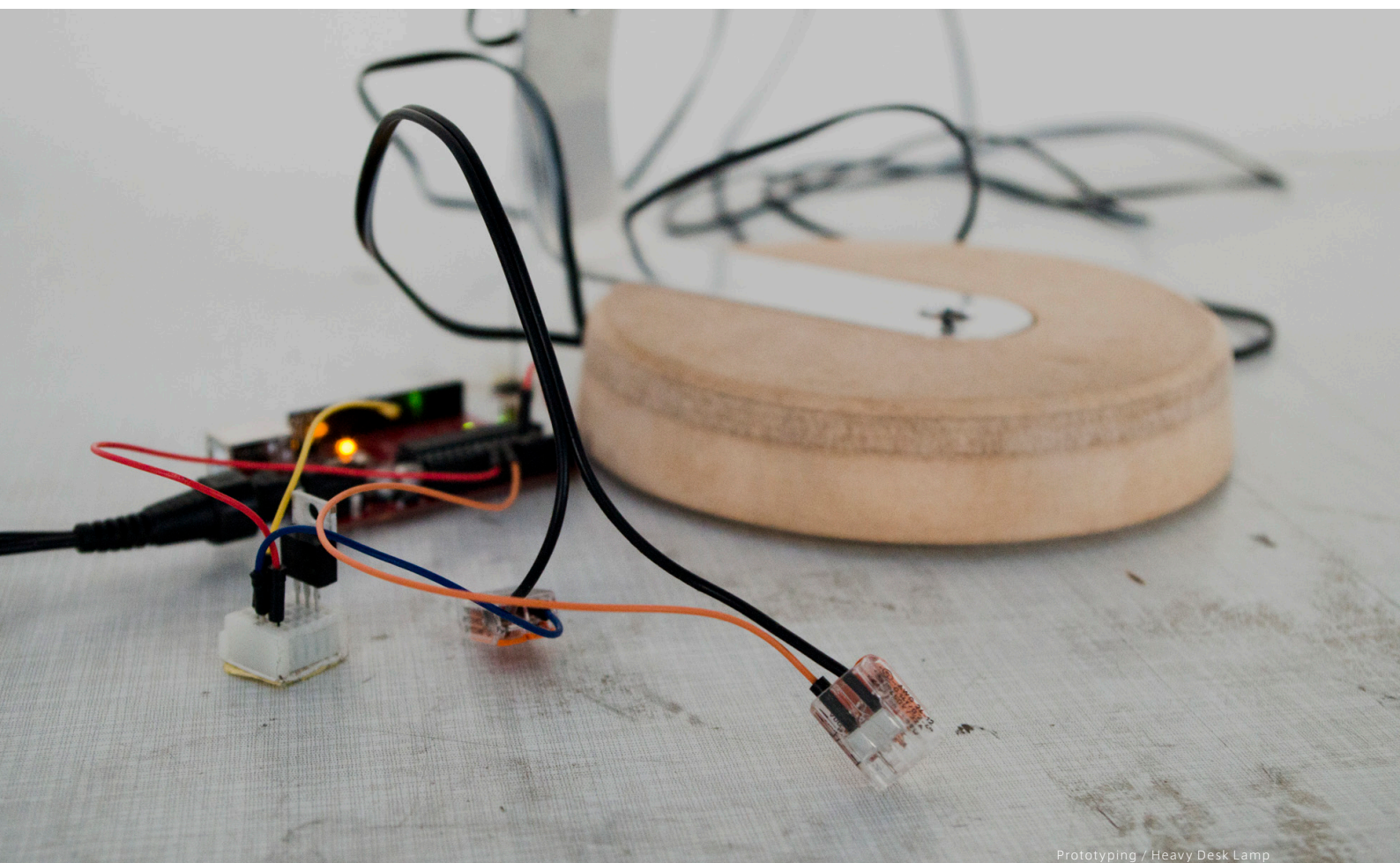
と呼ばれる電車の場合は駅構内で、Uバーンと呼ばれるトラムの場合は車内でチケットを打券機に通し、乗車時間などが入ったスタンプをチケットに打つ必要がある。係員が回って来た時にスタンプのないチケットを持っていると、ペナルティを支払わなくてはならない。また区間に関係なく2.9ユーロかかるため、場合によってはかなり割高である。ただし学生の場合はIDを提示することで自由に乗ることができるので、郊外に住む私も安心して通学できる。

また、ペットボトルや缶の資源管理が独特である。スーパーマーケットで飲料などを購入する際、ペットボトル入り飲料には0.25ユーロの保証金が課せられ、飲み終えた後にそれらを返却すると保証金が返還されるという仕組み。ポイ捨てはもちろん、一般ゴミに混ぜて捨てられることを防いでいるといえる。

どこの店舗に返却してもよいが、店舗によっては回収機の調子が悪く何度投入しても受け付けてくれないことがある。



Weiden Zentrum KVB Tram Station / Rhein.Center Shopping Mall



Prototyping / Heavy Desk Lamp

STUDY Studie

勉強について

2校目となるKISDは、3月26日から短いワークショップで始まった。KISDには木材、金属、陶器の工房とプロトタイピングのラボがあり、それらの扱いを体験するためというような内容であった。イギリスのデザイナー Benjamin Houbelt による Heavy Desk Lamp をコピーし、センサーとLEDを組み込むプロトタイピングを行った。

木材の工房では、木材を加工するための工具や機械を自由に使うことができる。またフィルターやイヤーマフなどの設備も整っ

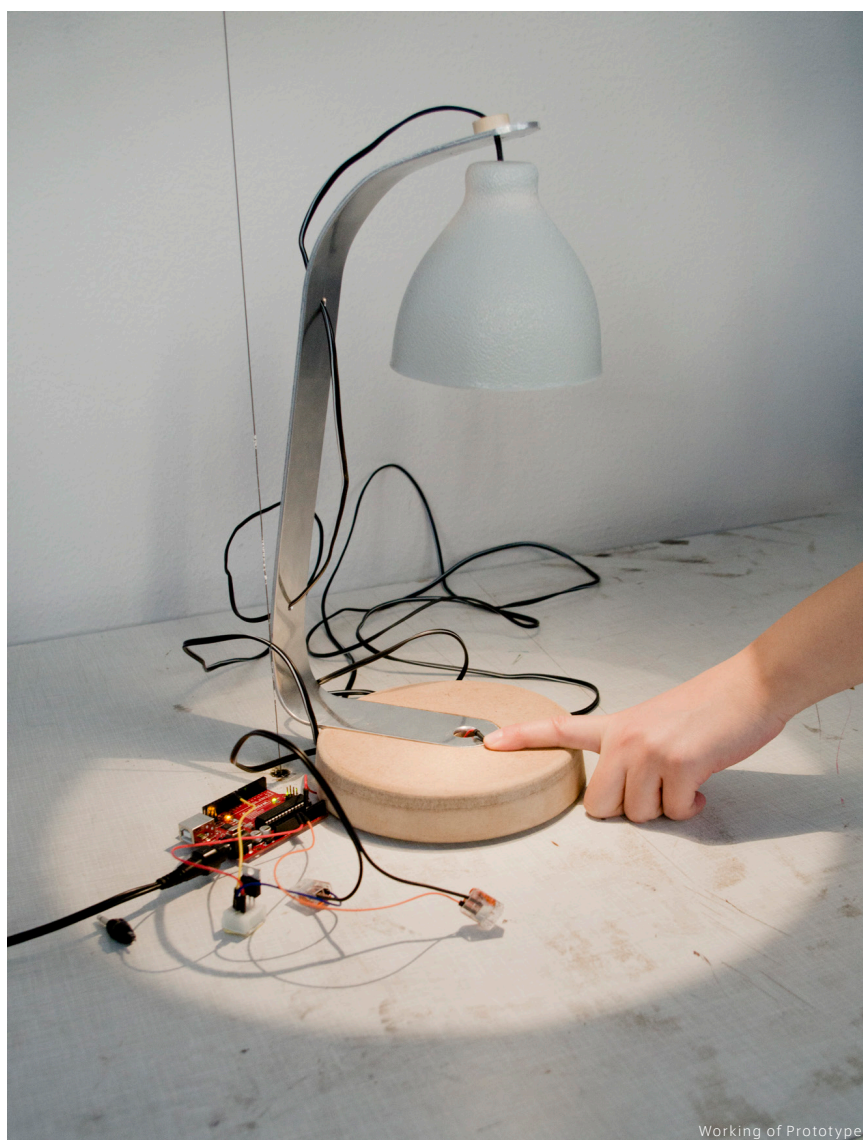
ており、快適に作業できる。ワークショップ中もKISDの学生が自身の制作を行う姿を見かけ、非常に扱いやすい環境だと感じた。金属の工房には工作機械、溶接、鍛造の設備が備えられ、広範囲の加工に対応しているように見えた。陶器の工房は見学のみであったが、機会があれば利用したいと思う。これらの工房以外にフードラボという大きなキッチンルームのような施設があり、食品を扱うプロジェクトで活用できる。



The Meister of Metal Workshop

各工房には担当の先生がおり、学生の制作をサポートしてくれる。

ワークショップ最終日には各グループが制作したランプが並んだ。スケール感やバランスはまちまちだったが、ごく短い期間で様々な作業を体験することができ、また他の留学生と交流できたのでとても有意義だったと思う。



Working of Prototype



Nuukisto National Park Helsinki, Finland

LIFE Leben

生活について

太陽を近く感じた。足の甲にはサンダル
の跡が残るほどの日焼けをした。かねてより
憧れていたフィンランドをこの機会を利用
して訪れることとした。長く寂しい冬を越
え人々はよろこびに満ちているように見え
た。オゾン層が薄く紫外線が強いらしく、
日の光がとても強い。サングラス越しにも
水面の反射が眩しかったが、その強い光の
中でフィンランドの森は美しい彩りを発
し、湖はそれを写し取った。
この時期の北欧は深夜でも空は青く薄明る
い。午後 10 時ごろまで夕日を楽しめる独

特な時を過ごすヘルシンキの雰囲気を感じ
る事ができた。海岸はもっとも深く夕日を
楽しむことができる場所だったと思う。
ヘルシンキ中央駅から電車で 1 時間ほど
の場所にある自然公園を散策した。森の中
の道を進んでいくと大きな一枚岩が現れそ
の上を歩くような道があったり途中で小さ
な湖があったりと、フィンランドの自然が
凝縮されたような場所だった。
ヘルシンキでは、ケルンとはかなり違った
様式の教会建築を見る事ができた。どの教
会もドームのような構造を持っていたが、



Temppeliaukion kirkko



Glass work by Diva Toikka

内装の様式はどれも違っていた。ヘルシンキ大聖堂は白く光に満ちた内装で、光を大切に、巧く使うマインドが感じられた。白い内装はもちろんのこと、窓周辺には陰影の勾配を表現するための曲面が設けられていた。また、岩盤をくり貫いてつくられた岩の教会ことテンペリアウキオ教会では現代的な特徴をその建築に見る事ができ私にとっては新鮮だった。

フィンランドに行った際にはそのガラス工芸に触れたいと思っていたので、ヘルシンキの北に位置するリーヒマキのガラス博物館を訪れた。人類におけるガラスの歴史とそれによって形作られたフィンランドの暮らしや文化までが紹介され、展示室には最新作から往年のフィンランドガラスとデザイナー達による作品が展示されていた。ガラスデザインの歩みとあくまで生産性に由来するその形態的な特徴の理解を深めることができた。

STUDY

Studie

勉学について



Acrylic Shishi-odoshi

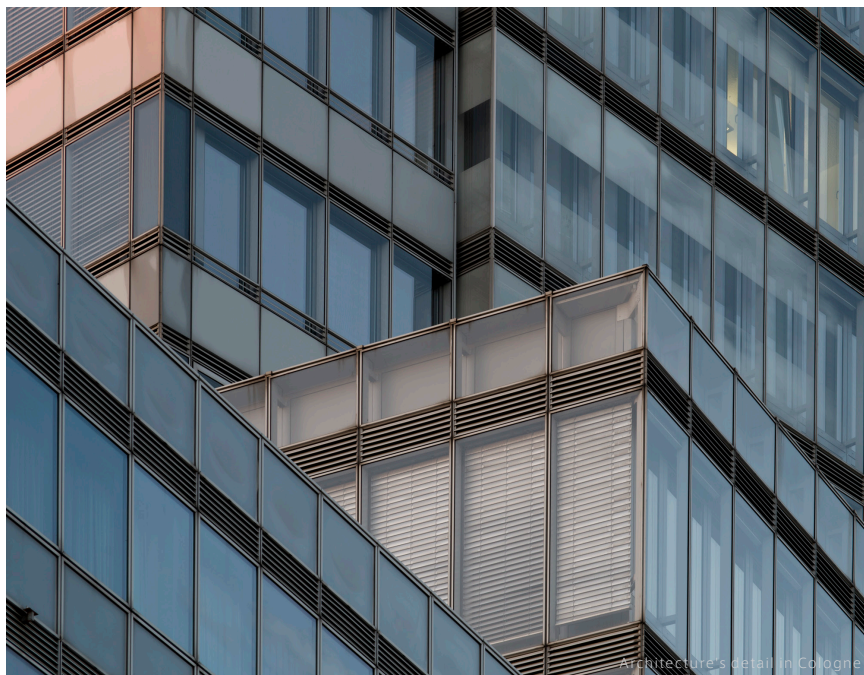
Project - Hyper Machines ではししおどしの試作が続いた。何が人をリラックスさせるのか、日本的なコンセプトを維持するかどうかなど、試作しながら思考を繰り返す形で作業は進められている。また、いわゆるししおどしが竹で作られているためあの形態をとっているのであって、自分たちのやろうとしていることには無関係である事の気づきがあった。構想がまとまりつつあり、コンセプトワークおよびディテールのブラッシュアップに時間をかけることができそうだ。

グループは私の他に、アメリカ、ドイツそして台湾の学生で構成されており、このグループは元々似たようなアイデアに共感したものが集まっているためディスカッションが活発に行われていると感じる。プロトタイピングから考察までのプロセスもなめらかに行われている。しかしながら互いに異なる文化を持っているためか、コンセプトワークではしばしば意見が対立することがある。その上でアイデアは洗練されるものでもあるし、両者を汲み取ることのできるものでもある。



'g' in the Universe type

Seminar では The devils in the detail というクラスに参加している。このクラスではプロダクトなどのディテールへの洞察を通してそれが持つ意味や文脈を認識する試みが毎週課される宿題という形でなされている。初期の段階ではぎりぎり認識できる程度にタイプフェースの一部分を切り取りそれがどのアルファベットか当てるというクイズのような形式であった。最近ではプロダクトのディテールが表現するブランドについて考察したりするなどより内容が高度になってきている。

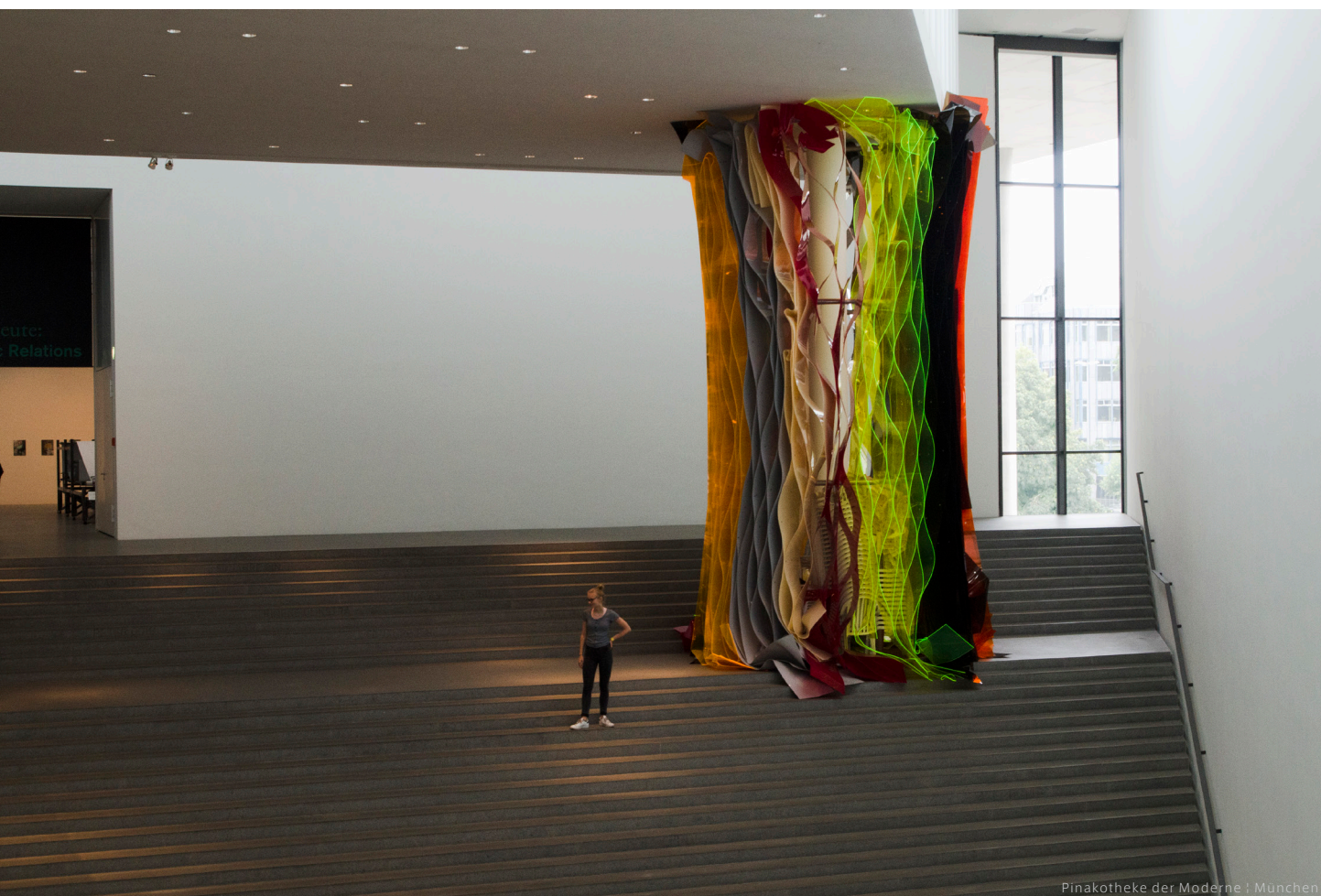


クラスの内容は物の見方としてディテールを観察する訓練とそれが持つ意味についての思考に満ちている。

ケルンの建築物のそれとは見えないようにディテールをサンプリングしプレゼンする回では、思い切りクローズアップされたディテールはその解像を超えるディテールの個性がその建築物を形作っていることに気づかせた。

プロダクトの意味を考える回では、プロダクトが持つ4つの意味 (Practical, Aethhetic, Signal, Symbolic) を考え、それに対応するプロダクトを探して写真を撮った。Practical Function は誰もがそれをそう使う、というようなプロダクトが持つ機能である。Aethhetic Function は細部への装飾やその審美性を極限まで高められたものの機能として定義されるためしばしばプロダクトたり得ない。Signal Function はボタンやツマミなど、プロダクトがその扱いを暗示するような機能である。そして Symbolic Function はプロダクトの物質的な機能を超えてそれにまつわる文脈を伝える機能である。この定義において文脈 (Context) をひとつの機能として扱うところがとても興味深いと感じた。





Pinakothek der Moderne : München

LIFE Leben

生活について

7月はじめにミュンヘンを訪れた。ミュンヘンまでは高速バス Flixbus を利用することで6時間ほどで着く。運賃も20ユーロほどで、ヨーロッパ内を気軽に旅行することができる。毎度のことだが安宿に泊まり、観光名所に寄ることなく美術館や博物館を巡る旅となった。ミュンヘンに着いてまず感じたことは、ケルンとの雰囲気の違いだった。ケルンはどちらかといえばリスボンのように開放的で陽気な印象があったのだが、ミュンヘンかというと私が「ドイツらしさ」と感じていたような、お

となしく真面目な印象を抱かせた。また街を歩いているだけでもケルンにはない大きなゴシック建築や銅像が目に入り、2つの街が異なる文化を持っていることに気付かされた。

ミュンヘン市内の移動は主にメトロを利用した。このメトロはケルンの場合と同じく切符を買って打券機に通すタイプで改札はない。

はじめに世界一の科学博物館とも言われるミュンヘン博物館を訪れた。ここにはあらゆる分野の歴史的遺産から最先端の技術ま



Generator | Deutsches Museum



BMW Design | BMW Museum



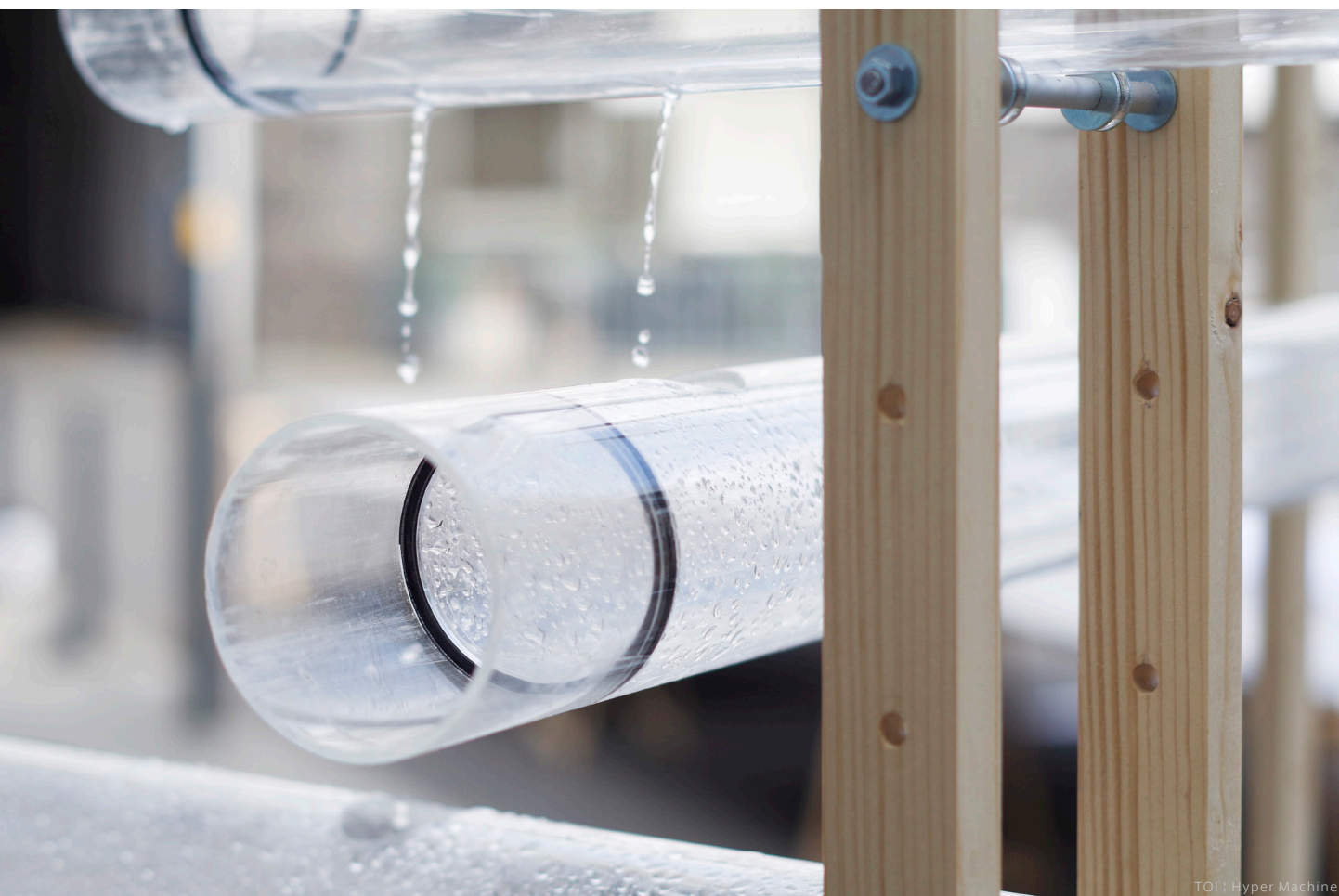
Ettore Sottsass, Raumteiler/Room divider, 1961, Memphis, IT

Leaning Memphis

で幅広く展示されており、全てを網羅的に見るには1週間ほどかかりそうなほどであった。博物館1階にはドイツで使われていた発電機や巨大な変電用トランス、直流発電のための使われなくなった機械などが展示されており、その博物館がアピールしたいドイツの威厳や自信のようなものを感じた。

次に訪れた BMW 博物館では BMW の歴史やデザインの変遷、ものづくりに対する哲学をインスタレーションとして表現したものなどを見ることができた。特に印象深かったのは BMW デザイングループの展示室である。中心にクレイモデルが鎮座し、それを取り囲むように写真とデザインの取り組み方を解説したテキストがモザイク状に配置されていた。それは決して華やかなものではなく、ひたむきにものづくりを行う BMW デザイナーの姿が紹介されており、とても印象深かった。

デザイン学生にぜひ訪れていただきたいのが、ピナコテークデアモデルネという現代アートとデザインの美術館である。常設展では教科書に載っているようなマスターピースを直接目にすることができ、写真ではわからないディテールを観察することができるような展示方法をとっている。企画展ではつねにセンセーショナルな内容を扱っているようで、私が訪れた時は田中一光のポスター作品の中から「顔」をテーマに抜き出して展示していたり、デンマークのデザイナーによる、人間が制御した造形と自然の揺らぎによる造形の間を表現したような作品を見ることができた。



TOI : Hyper Machine

STUDY Studie

勉強について

4ヶ月の長さを費やしたロングタームプロジェクト Hyper Machine もついに終わりを迎えた。7月に入り締め切りまであと2週間という段階でこれまでプロトタイプとして使っていた柱をすべて作り直した。プロトタイプでは反りのある素材を使っていたり、まっすぐに立っていなかったりなどしたため最終的な完成度を損ねるおそれがあったためである。最終的な柱のデザインは私が担当した。その中で、分解可能な脚部と単一材料の使用、等間隔に穴を設けることにより、そのアピアランスをさりげな

いものとすることを目標とした。プロダクト全体としての目標は水の動きを見せることであるための処理である。こうしたアピアランスの統制を異文化の学生間でとることはかなり難しかったと感じる。文化によらない普遍的な良さのようなものを伝えるにはきわめてロジカルな思考が必要だと考え、なるべくそのようにコミュニケーションをとるよう努力した。



プレゼンテーションを終えた後のエキシビションでは、作り手にはわからない様々なリアクションを見ることができた。自分で作ったものを人に見せることは、想定した体験が起こっているかのフィードバックとなるだけでなく、客観的に作品を見せるいい機会となる。人々の目にさらされる状況で、冷静に作品を見つめ直すことができる。それが上手くいったかどうかではなく、自分の辿ったプロセスは正しかったのか、そうであればそれが次の制作への自信になっていくのだと思う。





セミナー The devil in the detail では、最終課題として30センチの立方体の中に、日常の特別なシーンを切り取って表現した。私はそこで、ドイツ生活の中で印象的だったトラムにおける乗り遅れた人を助けたくなるシーンを表現することとした。他の学生の作品も様々な視点で表現されており興味深いものばかりだった。

Mentoring では自分の能力や強みを明確にしてシェアするためのマップを作成した。また、最終プレゼンでは、KISD で体験した全てのことを表現し、レポートと合わせて提出した。

私の留学生生活を振り返って見ると、新たに学んだことよりも、新たな人や文化との出会いがのちの人生に与える影響は大きいと思う。



Task11 : Specific situation

